

の孫石衛門の支配であつた。明治四年八月廿八日太政官達により穢多非人の稱を廢して民籍に編入せられた。

エダゴンベエ 枝權兵衛 石川郡坂尻の人。

文政八年齡十七にして村肝煎となつた。當時手取川十八河原から富樫用水を引いてあつたが、その取入口不完全なるを以て、灌漑の功を奏すること少かつた。その後權兵衛は井肝煎を兼ねてゐたが、加賀藩産物方の吏小川良左衛門と謀り、私財を擲つて、慶應元年二月白山村安久壽淵から隧道百七十間連河四百間に工事に着手し、明治二年五月に竣つた。是の於いて流域三十九村の民その徳を慕ひ、爲に二人の生祠を建てた。同十三年二月二日歿、齡七十二。昭和三年十一月十日功を賞して従五位を追贈せられた。

エダダニ 枝谷 能美郡鍋谷川上流の一溪谷。

エダマチ 枝町 金澤の町名。新繁町の中程、廣見の裏町で、杉浦町の上である。此の附近昔は河原で、穢多の居住地であつたので、後に町地となつてからも穢多町と呼んだが、その文字を忌んで枝町に改めたといふ。

エチゴジン 越後獅子 金澤では、毎年三月越後から角兵衛獅子が来た。土俗専ら之を越後獅子といつた。

エチゴセンソウ 越後戦争 (一)前記—慶應四年(明治元)正月七日朝廷徳川慶喜征討の勅を發し、九日北陸道鎮撫總督を高倉永祐、副總督を四條隆平に命じ給うたが、十五日總督等先づ辭を發して諸侯の向背を確めたに、加賀藩を初め皆王事に盡くすべきことを誓つた。既にして總督は二十日京を發し、廿五日

若狭小浜に至つて慶喜征討の令と、舊幕府の領土を政府の直轄とすべき布告を北陸道諸藩に下した。二月六日高倉永祐を改めて先鋒總督兼鎮撫使、四條隆平を先鋒副總督兼鎮撫使と稱せしめられた。この日總督は佐柿に進み、七日越前敦親に至り、十一日諸藩に命じて官軍に對する供給を準備せしめた。この時京都に在つては、十九日加賀藩の重臣が、前出慶喜の從來の行動に關して朝廷から詰問せられたるを以て、之が辯明を試み、その赤誠を明らかにせんが爲、本藩をして北陸道に進撃せしめんことを請ひ、廿一日慶喜もまた藩が獨力先鋒たるのみならず、王師の要する軍費を賦納せんと請うたが、廿三日廷議之に報じて、先鋒及び軍資の事は許可し得ぬが、將に親兵を徵發せんとするを以て、之に對する費用に就き盡力すべきことを命じ給うた。二月廿九日總督は金津を發し加賀大聖寺に入り、晦日小松に、三月朔日松任に進み、二日金澤東本願寺別院に入つた。五日慶喜は親兵の費用として米七十萬石を七年に分納せんと請うて許された。六日總督金澤城を巡閱し、又能登の舊幕府領を改めて加賀藩に委託し、同國の土方領は當主兼三郎の態度明瞭となるまで、假に慶喜をして之を管せしめた。八日總督金澤を發し、十二日越中泊に着し、十七日令を越後諸藩に下し、會津の兵若しその領内に入らば、諭して本國に歸らしむべく、敢へて命に抗する者あらば直に誅劔するを妨げずとし、乃ち高田藩主棟原政敬・新發田藩主澤口直正をして相援けて事を處せしめた。次いで十九日總督は高田を發し、四月四日江戸に入つて淺草の本願寺別院に次した。

(二)加賀藩の出兵—前將軍徳川慶喜は東叡山で謹慎し、四月四日には更に水戸に移されたが、東北諸侯の強硬なるもの王師に抵抗の勢を示したから、朝廷之が討伐を謀り、十五日には加賀藩、十八日には富山藩も亦出兵すべきことを命じ、十九日高倉永祐に北陸道鎮撫總督兼會津征討總督を命じ、次いで總督は北陸道各藩に知行一萬石に六石の比例を以て糧米を徴した。當時越後の形勢は益不穩の報を傳へたから、加賀藩は四月廿四日初めて銃隊馬廻組頭齋藤與兵衛以下を越中泊驛に派したが、是より後順次出征したもので士卒千七百四十四人、監察軍吏九百五十三人、従僕役夫四千六百餘人で、總計七千六百餘に達し、而してその中の一部分は、支藩富山侯の助勢たらしめたものであつた。朝廷亦屢加賀藩に命じて軍需を供給せしめられた。その金員は最初金壹萬貳百五十拾兩を賦納し、五月には拾參萬兩の融通を命ぜられ、拾參萬兩中の拾萬兩は太政官發行紙幣を以て代償せられる定であつた。その他藩有の汽船豐島形も徵發せられ、白米一萬三千石以下の物資も多かつた。

(三)戰關—加賀藩は閏四月十五日越中泊に駐屯した諸隊を進發せしめ、十九日越後高田に入つたが、同日薩長の兵もこゝに來り、次いで尾張以下の東海道軍も來り會したから、全軍を別つて一は山道より魚沼郡に入らしめ、一は海道を取つて刈羽郡に入らしめることとし、而して薩長・加賀・富山等の諸隊は後者に屬することになつた。爾後閏四月廿七日の鯨波の戰を初として、五月十六日より十九日に至る長岡城占領戰、七月廿四日・廿五日の同敗戰、廿九日の奪還戰等に最も苦闘し、その

一部隊は遂に陸奥に入り、九月廿二日會津城の陥落するに及んだ。藩兵の凱旋は遲速相同じくなかつたが、最後のものは會津藩城後の處分に從ひ、翌二年二月金澤に還つた。その戰死するもの、司令・戰士・隊卒・役夫合はせて百六人であつた。

(三)大聖寺藩の關係—この戰爭に於いて大聖寺藩は、官命により彈藥を提供することとなり、炮司令役内藤政輔をして越後柏崎に輸送せしめたが、政輔はその任務を終へた後、加賀藩津田權五郎の隊に入つて雷村に進撃した。次いで八月大井市兵衛を派して長岡の戰蹟を視察せしめ、十月また鎮成の爲若千の兵を出した。

エチゴヤシキ 越後屋敷 金澤城内に在つて、藩侯の江戸在府の時毎年寄以下定日を以てこゝに會し、政務を議したもので、そのこゝとは前田綱紀の時元祿十年に初つた。後寶曆六年正月八日出火して廢せられ、常に二、九御殿で執務することになつたが、文化八年前田齊廣新たに之を建築し、古例に復した。之を越後屋敷と呼ぶのは、初め富田越後守重政及びその子越後重康の居邸であつたからである。此の園内の空地に岩時島といふ石があつて、その附近に不淨の所行をすれば、即時に亂心するといはれた。此の石は越後居住の時に安置した摩利支天堂の下にあつたものだといふ。

エチセンノクニエヌマゴホリヤマシロゴウ ケイチヨウ 越前國江沼郡山背郷計帳 正倉院文書天平十二年の斷簡で、江沼郡山背郷戸主江沼臣族乎加非及び江沼臣族忍人の戸計帳である。乎加非の家の同住者は、不課口參拾八